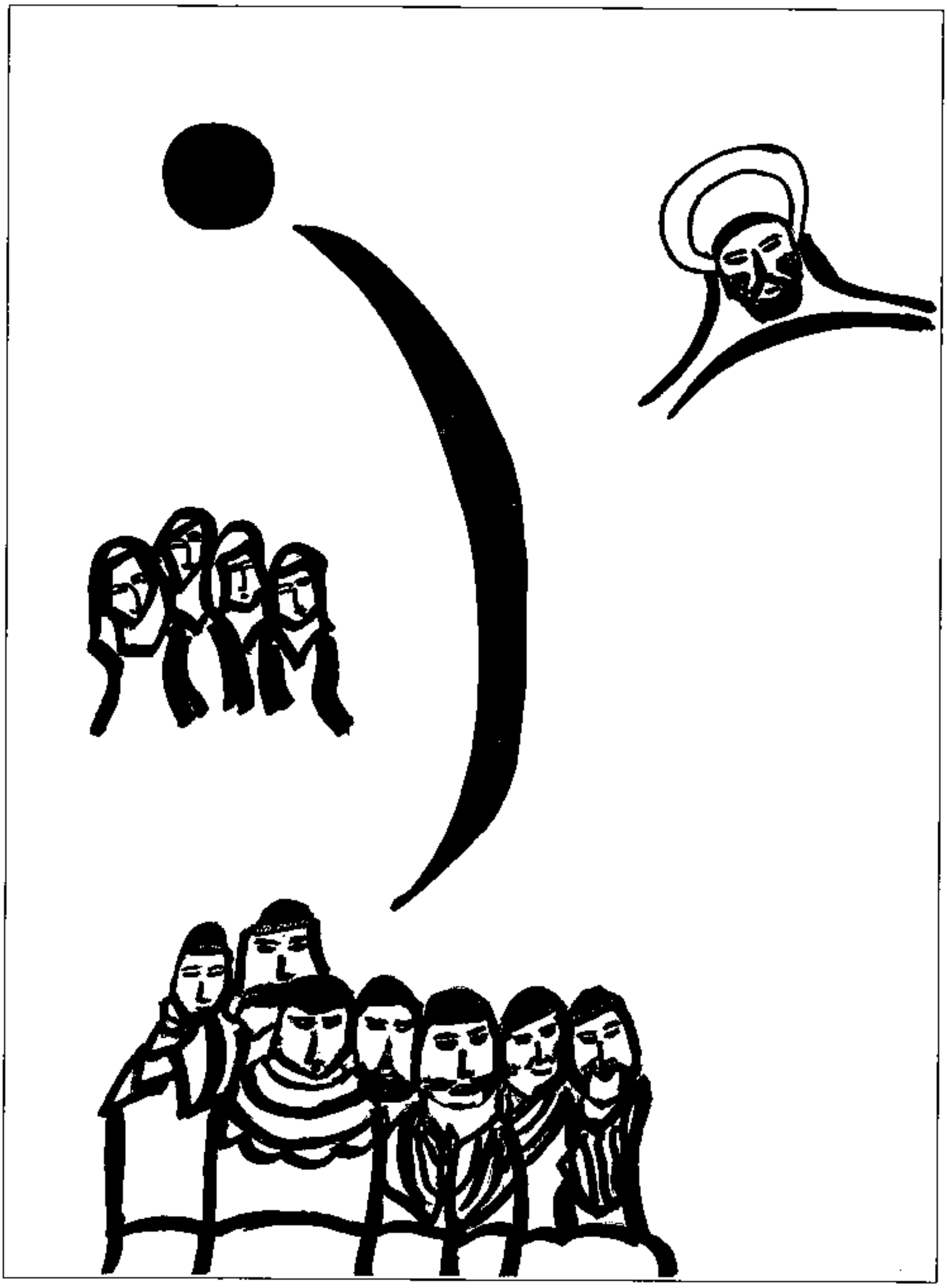
W.A.Mozart Requiem KV 626(Beyer版)
J.S.Bach Magnificat BWV243



1997年2月16日(日)
アクトシティ浜松中ホール

主催：浜松バッハ研究会
後援：浜松市・浜松市教育委員会
：(財)浜松市文化協会
：(財)アクトシティ浜松運営財団

☆★☆★☆　代表のご挨拶　★☆★☆★

本日は浜松バッハ研究会演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。昨年は創立１０周年記念として、ここアクトシティ浜松中ホールで満員のお客様をお迎えして「マタイ受難曲」全曲を歌うことができ、演奏する喜びとともに今後活動を続けていく上での大きな励みを得ることができました。そして、今回またこのホールで演奏会を持つことができたのも、我々の活動を暖かくご支援してくださる皆様のおかげと深く感謝しております。

今回は私たちの活動の中心であるバッハによる「マニフィカート」と、最も有名な宗教曲といえるモーツァルト作曲「レクイエム」を演奏いたします。「誕生」と「死」という大きなテーマを持ったこの２曲ですが、浜松バッハ研究会らしい、バロック音楽らしい演奏をめざして練習に励んでまいりました。まだまだ未熟な演奏ではございますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

さて私たちは新たな10年をめざして、指揮者三澤洋史のもとでバッハの作品を通じて演奏技術と表現を高めるとともに、近代・現代の曲にも機会があれば挑戦したいと考えています。今後もぜひ私たちの演奏会に足をお運びくださるようにお願い申し上げます。

最後になりましたが、本日ご来場下さいました皆様、常日頃より私達の活動を支えて下さっている皆様に会員一同心から感謝いたします。

浜松バッハ研究会代表　早川　徳次

♪♪♪♪♪　上演曲目　♪♪♪♪♪

J.S.バッハ「マニフィカート」
J.S.Bach: Magnificat (BWV243)

休憩： Intermission

W.A.モーツァルト「レクイエム」（F.バイヤー編曲）
W.A.Mozart: Requiem (KV626, arr. by F. Beyer)

1990年の演奏会以来、上演曲目のイメージに合ったイラストと共にちらしやプログラムの図案を作成していただいた今村英男氏が1996年夏、ご逝去なさいました。氏は長年社会教育に携わる傍ら、学生時代から絵画の研鑽を積んで来られました。昨年私たちの「マタイ受難曲」の演奏をお聴きになり、それ以前から３年がかりで取り組んでこられた絵画集『マタイ受難曲の心象』を完成された直後の訃報でした。

浜松バッハ研究会が今日あるのは、多くの方のお力添えがあってのことですが、その中には既に故人とならた方も大勢いらっしゃいます。本日の演奏はそういう全ての方々に捧げたいと思います。

浜松バッハ研究会一同

♀♂♀♂♀　出演者一覧　♂♀♂♀♂

合唱団

ーソプラノー

井浦芙蓉子
岩瀬美知子
岡留美
古賀晴美
酒井恵子
鈴木真由美
富安典子
丹羽多美子
深尾久子
毛利優子
森田なぎさ
守田牧子
渡辺美恵子
今井久子*
今村陽子*
奥山貴子*
杉浦紫*
鈴木多恵子*
早川実花*
古山和恵*
三宅ゆりの*

アルト

安藤美津恵
石井公子
井戸恵子
伊藤ゑり
小貫素子
木山道子
小酒井久美
小杉由子*
鈴木理恵
武田清美
野寄友佳子*
長谷川明子*
森上みどり
森田悦子*
山田セキ子
和仁静代

テノール

岡雅章
柏木俊之
川口強
武石薫
戸島準一郎
成田孝宏
丹羽哲也
早川徳次
深尾正之
森光彦
山田明生

バス

青木繁光
安藤祐治
生駒修治
岡村好偉
小貫勇作
坂田宏信
高森義之
萩野潔
長谷川正仁
長谷部雅彦
安井研一

＊印：マニフィカートではソプラノⅡ

［**練習伴奏ピアニスト**　：稲垣順子（浜松）、高木克子（豊橋）］

管弦楽団

第１バイオリン	北川靖子、生駒尚子、井上雄史、小沢規子、建部好美、東儀温、中林尚之
第２バイオリン	木村英道、工藤裕子、神農佐知子、花尾四郎、藤野万紀子、山本有紀子
ビオラ	秋元紀子、井上麻里、坂入賢一、徳弘太郎、中谷宏、山内絵理
チェロ	神農清志、小川美菜子、山内明
コントラバス	田邑元一、横田健司
フルート	木村伊都子、松永寛美
オーボエ	宮岡慎里、吉野康子
バセットホルン	田中昌明、美和雅樹
ファゴット	曽布川利貞、矢野祐幸
トランペット	ロジャー・マナーズ、磯部謙作、庭田俊一
トロンボーン	伊東泰二、対馬隆、渡辺隆行
ティンパニ	野々垣行恵
オルガン	花井淑

ソプラノ独唱：田村麻子

アルト独唱：小田薫

テノール独唱：西垣俊朗

バス独唱：長谷川顕

指揮：三澤洋史

♀♂♀♂♀　主な出演者のご紹介　♂♀♂♀♂

指揮：三澤洋史　群馬県出身。国立音楽大学声楽科卒業。在学中より指揮者を志し、故山田一雄氏に師事。その後ベルリンに渡り、ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。帰国後はオペラ指揮者としてデビュー。二期会音楽スタッフの中心的存在として活躍。二期会合唱団を中心とした我が国の合唱指揮者としての地位は、今や不動のものとなっている。サバリッシュ、ホルスト・シュタインなど外来指揮者からの信頼も厚い。バッハに深く傾倒し、「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「ロ短調ミサ曲」などを全て暗譜でレパートリーに持つ。声楽を伴うオーケストラ作品の全ての分野に精通する。名古屋芸術大学客員教授、東京芸術大学・京都教育大学非常勤講師。

ソプラノ独唱：田村麻子　京都府出身。４歳よりピアノを始める。都立高校を経て国立音楽大学声楽科卒業。在学中に海外派遣奨学生に選ばれザルツブルグ国際アカデミーに参加、モーツァルテウム音楽院にてグレース・バンブリーに師事、アカデミーコンサート出演。現在東京芸術大学大学院３年在学中。これまで同大学院主催オペラ「コシ・ファン・トゥッテ」のデスピーナ役、八王子市民オペラ「椿姫」のヴィオレッタ役、「愛の妙薬」アディーナ役に出演。またヘンデル「メサイア」、ベートーヴェン「第９」、フォーレ、モーツァルトの「レクイエム」、バッハカンタータ等のソリストを務め、第５回全日本ソリストコンテストにてベストソリスト賞受賞。第27回イタリア声楽コンコルソ-ミラノ部門入選。また96年夏PMFオーケストラ「コシ・ファン・トゥッテ」においてデスピーナ役ヌッチァ・ファォーチレのアンダーとして、Ｃ．エッシェンバッハに認められる。ピアノを福井尚子、三村和子、下村知子に、声楽を篠崎寿、永井和子、故木村宏子、故柴田睦隆の各氏に師事。

アルト独唱：小田薫　信愛学園（現・学芸）高等学校音楽科卒業、武蔵野音楽大学音楽部声楽科卒業。佐藤安子、岡崎雅明の両氏に師事。卒業後二期会合唱団に所属し、数多くのオペラやコンサートに出演。平成８年２月、浜松バッハ研究会による「マタイ受難曲」の演奏会にソリストとして出演。現在、二期会合唱団準団員。

テノール独唱：西垣俊朗　大阪音楽大学大学院修了。在学中より宗教曲に手を染め、カンタータ、オラトリオの演奏には欠かせないコンサート歌手として活躍。特にバッハの「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」等の“エヴァゲリスト歌い”として高く評価されている。1978・79・85年、名テノール E. ヘフリガー氏と「マタイ受難曲」で共演。1984年と85年には日本オラトリオ連盟のソリストとして、ヨーロッパ各地で演奏し好評を博す。またアルカディア協会の1989年夏のシンガポール演奏旅行と1990年夏のシンガポール、ヨーロッパ演奏旅行のソリストとして各地で好評を博した。オペラでは1976年、東京オペラ・プロデュース公演のロッシーニ「オリー伯爵」でデビューし、以後「放蕩息子」「スペインの時」「セヴィリアの理髪師」「ビヴァ・ラ・マンマ」などに出演。また関西二期会を代表するリリック・テナーの一人として「魔笛」「ドン・ジョバンニ」「セヴィリアの理髪師」「真夏の夜の夢」「こうもり」「コシ・ファントゥッテ」などの主役を務めている。

　昭和59年度神戸市文化奨励賞受賞。浦山弘三、E.ヘフリガーの両氏に師事。関西二期会会員、神戸音楽家協会会員、日本シューベルト協会同人。現在、大阪音楽大学講師。アルカディア室内合唱団副指揮者・ヴォイストレーナー。平成６年度兵庫県芸術奨励賞受賞。

バス独唱：長谷川顕　香川県生まれ。国立音楽大学声楽家卒業。二期会合唱団に15年間在籍し、年間40本に及ぶオペラ公演や、多数の演奏会に出演、内外の著名な指揮者、演出家、ソリストに接することで舞台の表裏ともに貴重な経験を積み重ねた。ソリストとして、オペラでは「ボエーム」のコルリーネ、二期会「ワルキューレ」フンディング、「魔笛」のザラストロ、などのバスの主要な役を演じている。また一方では、バッハ「ロ短調ミサ」、「マタイ受難曲」、モーツァルト「レクイエム」、そしてフォーレ「レクイエム」などキリスト教会音楽のソリストとしても活躍している。二期会会員。

コンサート・ミストレス：北川靖子　幼少より父に手ほどきを受け、後 W. シュタフォン・ハーゲン教授に師事。東京芸術大学卒業後、ウィーン国立アカデミーにて F. サモヒール、 F. ホレチェックの両教授に師事。1975年、同大学を全教授一致の最優秀賞で卒業。1976年から1984年までハンブルク交響楽団、ハンブルク室内合奏団のコンサート・ミストレスを務める。1985年12月からピアノの北川暁子と「ドゥオの夕べ」を開催。ソロリサイタルの他、チェロの千本博愛、北川暁子とピアノ三重奏団セルヴェ・トリオとして演奏活動を行っている。

ティンパニ：野々垣行恵　２歳よりピアノ、６歳よりソルフェージュの教育を受ける。９歳より打楽器を始める。1994年愛知県立芸術大学卒業。在学中よりオーケストラ等のフリー打楽器奏者として、愛知県を中心に東海地区で活躍中。現在同朋高等学校音楽科講師。これまでに白川和彦、鈴木田まり子、岡田知之、今村三明、佐野恭一の各氏に師事。

オルガン：花井淑　名古屋音楽大学音楽部器楽科卒業。オルガンを住山玖爾子、本田七瀬、Ｆ．ボーンの各氏に師事。また、Ｚ．サットマリー、Ａ．シェーンシュテット、Ｈ．フォーゲルの各氏によるオルガン・マスタークラスに参加。1982～1986年、名古屋音楽大学嘱託研究員を経て、現在、名古屋・カトリック五反城教会オルガニスト、五反城教会オルガニスト養成コース講師。四日市・KAIEN'S HALL "ムーシケ"専属オルガニスト。古楽アンサンブル＜アーベント・ムジーケン＞メンバー、ソリスト及び通奏低音奏者として活躍中。日本オルガン研究会、日本オルガニスト協会会員。「浜松バッハ研究会」演奏会には1996年、創立10周年記念「マタイ受難曲」全曲演奏会に出演。
＊本日使用するパイプ・オルガンは高山市在住のオルガン製作家、田尻隆二氏作のコンティヌオ・ポジティフです。

浜松バッハ研究会管弦楽団　浜松交響楽団、浜松室内楽愛好会、浜松バロック・アンサンブル、ヤマハ吹奏楽団などから、バッハおよびバロック音楽をこよなく愛する有志が集い、バッハ研究会公演の度に組織される。少ない練習にもかかわらず、レベルの高いアンサンブルで好評を得ている。

☆★☆★☆　「神戸へ」 三澤洋史　☆★☆★☆

新幹線に乗った時、私にはまだ微熱が残っていたと思う。年末年始に名古屋バッハ・アンサンブルコールを連れて、大寒波襲来中のドイツへ演奏旅行に行った疲れがここに来て出たのか、まる二日間熱を出して寝込んでしまった後だった。けれど神戸には何としても行かなければならない。私の心の中で強く叫ぶものがあった。神戸へ・・・神戸へ・・・と。

本日のソリストでもある西垣さんから、震災から二年たつ神戸でメモリアルコンサートをやりたいのだが指揮者がいないとぼそっとこぼされたのは、昨年十月の名古屋の演奏会でだった。とっさに手帳を見てスケジュールを確かめながら「僕でよかったら」と答えた時の彼の嬉しそうな顔が忘れられない。曲目はヘンデルの「メサイア」。ソリスト、アンサンブルは神戸在住の音楽家達。合唱は何と、以前私が指導していて、ヘフリガーの福音史家で「マタイ受難曲」も振らせていただいた事のある北九州聖楽研究会のメンバーが30人ほど小倉からかけつけてくれるとの事。久々の再開の期待に私の胸は踊った。

神戸の街は、震災から二年たった今、すっかり立ち直っているように見えた。一年前に訪れた時、あちこちに目についた青いシートも影をひそめたし、三宮界隈のビルの谷間の空き地には次々と新しいビルが建ち始めていた。

演奏会は14日が元町の神戸教会、15日は長田区のグラス・アンカーという喫茶店。北九州のメンバー達と懐かしい再会を果たし、神戸教会での本番を向かえようとした時、私の中にある込み上げる思いがあった。それは「メサイア」という曲に表現されたキリストの受難と復活の意味が、全く新たなものとして私を貫いたのである。復活はその前に必ず受難すなわち死を包含している。復活は単なる歓びではない、死を受け入れ、死を抱き込んだ末の希望なのだ。こうしたイデーが抗い難い力を持って私を包んだ。私はそれをみんなに伝えた。演奏会の直前、牧師さんのお話しがあった。驚いた事に全く同じ事を話された。同じ想いで結ばれている私たちの内に聖霊が燃えていた。

翌15日。快晴。会場の喫茶店に着いてみるともうみんな店の前で日なたぼっこをしている。私は三宮あたりを見て神戸はもう立ち直っていると勝手に思い込んだ自分の認識の甘さを恥じた。空き地。空き地。仮設住宅。寝まき姿のお年寄りがやかんを持ってヨロヨロ歩いている。焼け焦げた石灯籠。ここはまだ被災地そのものなのだ。その中に妙に不釣り合いに建っている真っ青なカナディアン建築。それがグラス・アンカーだった。この店は西垣さんの妹さん夫婦が経営している。昨年11月に再オープンしたばかりだ。再オープンというのは、以前この敷地内に旧店舗と古い日本家屋が建っていたのだが、震災でつぶれてしまったのだ。妹さん夫婦は奇蹟的に助かった。けれど痛ましいことに息子さんと娘さん、それに御主人の両親を彼らは失ってしまった。にぎやかな六人家族が一瞬にして二人だけになってしまったのである。必死の遺体救出、しかし炎が無情にもやってきて・・・。子を持つ私には涙なしに聞く事は出来なかった。

私達は今日の「メサイア」の演奏会が自分達一人一人にとって特別な意味を持つようになることを予感した。私はもう一度自分の心に問うてみた。「何故自分は神戸に来たのか？」

私は自分の人生の中で様々なものと同化しようと努めてきた。ヘンデルだってバッハだって、自分がもし彼らの音楽に興味を持たなければ、私と彼らの音楽は無関係なままである。けれども関わり方によっては彼らの音楽は私の人生を180度回転させる力を持っている。私が西洋芸術と同化することによって、人類の共有財産である西洋芸術は私の中で生きる。同じ事がネガティブな事柄についても当てはまるのではないか。私はきっと同じ時代に生きるものとして神戸の震災を素通りするる事が出来なかったのだ。だからこれらと同化し－完全に同化することなど不可能であるが－神戸を自らの内に取り入れて生きようとしているに違いないと想った。だが私としては精一杯真摯なこの熱い想いさえ、安っぽいセンチメンタリズムと感じさせるほどに、神戸の悲しみは深い。幸せな自分の生活からぽっとやってきていったいどうしようというのか？　子供を失った親の悲しみ、親を失った子の悲しみが癒えることなど決してないではないか。建物は新しく建っても、神戸が真に**立ち直る** ことなどあ

り得ないのではないか。けれどもそれでは、このメモリアルコンサートを企画した西垣さん達の想いはいったいどうなのだろう。私は想った。悲しみは癒えない。癒えないけれど、だからといって人々は貝のように心を閉ざして何もしない訳にはいかない。彼らは**生きなければ** いけない。子を失っても、親を失ってもそれでも生きなければならない。何故という問いはない。これはこの世に生まれ落ちた我々に対する神の至上命令なのだから。

癒えても癒えなくても「生きる」為に「メサイア」をやる。私の腹は決まった。北九州のみんなもきっと同じ気持ちだったと思う。

涙、涙の感動的演奏だった。入り切れない聴衆がテラスに溢れていた。天使が降りたっていた。神の臨在を真近に感じていた。生涯忘れる事の出来ないひとときであった。

今、私は神戸から遠く離れている。「マグニフィカート」の生の歓びと「レクイエム」の死の厳粛さに向かいあっている。我々の生は神の御手の中にある。生きようが死のうが・・・。ここがもし神戸だったら、「レクイエム」は私にはあまりにも辛すぎて出来ないに違いない。けれど今、私はあえて浜松から神戸に向けてこの演奏会を発信する。弔の歌としてではなく、神にいだかれた我々の命の賛歌として。死を内に抱きとめた者の復活への希望の歌として。

♯♭♯♭♯　解説と歌詞対訳　♭♯♭♯♭
バッハ／マニフィカート

ａ．マニフィカートとは

・聖書の中での位置付け　ルカによる福音書1.46～55の、マリアが主を賛える一連の言葉です。ラテン語訳聖書では「崇める」という意味のマニフィカート（Magnificat）という単語から始まるため、この通称があります。それまでのいきさつが書かれているその前の部分を要約します。

祭司ザカリヤは、彼の妻エリザベツが洗礼者ヨハネとなる子を宿したことを、主の御使いから知らされる。その数ヶ月後、今度はマリアが、救世主イエスとなる子を宿したことを御使いから知らされる。マリアがエリザベツに会いに行き挨拶をすると、ヨハネは胎内でおどり、エリザベツは聖霊に満たされてマリアを祝福する言葉を贈る。それに答えて、マリアは主を賛える言葉を述べる。

「私の魂は主を崇め、．．．アブラハムとその子孫に語られた通りです。」

教会暦の中にはこれを記念した「マリア訪問の祝日」（7月2日）というのがあり、ドイツ語マニフィカートの別名のあるバッハのカンタータ第10番(BWV10)などがこの日に演奏されていますが、ラテン語によるこの一連の言葉は教会では伝統的に晩課で使われており、C.モンテヴェルディの晩課のための音楽「聖母マリアの夕べの祈り」の最後を飾ることはご存じの方も多いでしょう。

・音楽的な伝統　マニフィカート用のグレゴリオ聖歌伝来の定旋律で有名なのが第９詩篇唱で、バッハの時代にはクリスマス、もしくは主イエスの訪れ（Advent）と結びつけて用いられていたそうです。バッハはこの旋律をもとにしたコラールを前出のカンタータ第10番では大々的に使用していますが、このラテン語版マニフィカート**BWV243**では**10.Suscepit**にてオーボエが演奏するのみです。

ｂ．作曲の経緯

1728～1731年に完成した**BWV243** ニ長調版（用途不明）に先立ち、**BWV243a** 変ホ長調版が1723年の降誕祭の晩課用に作られました。調性以外で**BWV243**と違うのは次の２点です。

・器楽編成　オーボエ・ダモーレがなく、**3.Quia respexit～4.Omnes generationes**はオーボエのままです。またフルートも一切なく、**9.Esurientes**の助奏はリコーダー２本です。そして**10.Suscepit**は定旋律がトランペット、伴奏がヴァイオリンとヴィオラのユニゾンにて演奏されます。

・４つの挿入曲　クリスマス向きのドイツ語とラテン語による４つの挿入曲があります。

ｃ．主な特徴

・他のバッハのラテン語宗教曲同様、ダカーポ形式の曲がありません。
・ミサ曲ロ短調（BWV232）同様、合唱は５声の曲が中心となっています。
・言葉の各曲への分け方／各曲の曲想は、モンテヴェルディの晩課と多くの共通点があります。
・各曲が短く、非常に凝縮された印象を受けます。
・言葉の音楽的修辞（言葉の意味を音楽が具体化する）が見事になされています。

ｄ．歌詞対訳と各曲解説

演奏に際して、歌詞の発音にはドイツ語的な発音を用いています。

1.Magnificat - Coro	**1.合唱**
Magnificat anima mea Dominum.	**私の魂は主を崇めます。**

トランペット３本とティンパニ（古くは特権階級の音楽のための楽器）を伴うニ長調（D：ラテン語でDeo=神の頭文字）の3/4拍子（３：三位一体の象徴）という、神を賛える音楽の典型的な３大要素を持ち合わせた曲です。８分音符の分散和音は主への賛美を、16分音符の動きは聖霊の訪れを表現しているという説があります。

2.Et exsultavit - Soprano II (Alto)

Et exsultavit spiritus meus in Deo salutari meo.

2.ソプラノII（アルト）独唱

そして私の霊は神が遣わされた
わが救い主を喜び待ちます。

救い主への期待に満ちた、明るい雰囲気が支配的です。exsultavit（喜び待つ）という言葉に付けられた、仰ぎ見るような上昇旋律が象徴的です。

3.Quia respexit - Soprano I

Quia respexit humilitatem ancillae suae:

ecce enim ex hoc beatam me dicent.

3.ソプラノI独唱

主はこの卑しい女をさえ
心にかけてくださいました。
ごらんなさい、今からのち、
私を幸いな女と言うでしょう。

自らを謙遜するかのような控え目な編成による短調の曲です。中でもhumilitatem（卑しい）という言葉に付けられた、隠れ入るような下降旋律が象徴的です。途切れずに次の曲に続きます。

4.Omnes generationes - Coro

Omnes generationes.

4.合唱

人々が子々孫々に渡って。

歌詞・音楽共々前の曲の続きです。主題が折り重なるストレットと共に、同じ言葉が反復されることより、物事が代々引き継がれる様が描かれます。中でも主題が音階的に積み重なる第５～８小節、第15～20小節が聴きどころです。

5.Quia fecit - Basso

Quia fecit mihi magna,
qui potens est, et sanctum nomen eius.

5.バス独唱

主が私に大いなる事をしてくださったのは、
主が力ある方で、主のみ名は神聖であるからです。

前曲もそうでしたが、主題の最初の同音反復は、確かな歩みの象徴です。曲調は主への信頼に基づく明るさが支配的となります。

6.Et misericordia - Alto / Tenore

Et misericordia eius a progenie in progenies
timentibus eum.

6.アルト／テノール二重唱

主の憐れみは代々、
主をかしこみ恐れる者に及びます。

弱音器付きの弦とフルートの柔らかい響き、短調の哀愁を帯びた美しい旋律が、神の憐れみを象徴しています。

7.Fecit potentiam - Coro

Fecit potentiam in bracchio suo,
dispersit superbos mente cordis sui.

7.合唱

主は御腕をもって力をふるい、
心の思いの驕り高ぶる者を追い散らされます。

全体の中心として器楽は再びフル編成です。potentiam（力）という言葉に付けられた打ち付けるような付点のリズム、dispersit（追い散らす）の部分の８分音符の分散和音などが象徴的です。

8.Deposuit potentes - Tenore

Deposuit potentes de sede
et exaltavit humiles.

8.テノール独唱

権力ある者を王座から引き降ろし、
そして卑しい者を引き上げなさいます。

deposuit（引き降ろす）、sede（座）という言葉に付けられた厳しさを帯びた下降旋律、potentes（権力ある者）の部分の力を誇示する、もしくは権力を嘲るような跳躍旋律、exaltavit（引き上げる）の部分の優しく緩やかな上昇旋律、humiles（卑しい者）の部分の下降旋律などが象徴的です。

9.Esurientes - Alto
Esurientes implevit bonis
et divites dimisit inanes.

9.アルト独唱
飢えている者を良いもので充たし、
富んでいる者を空しく帰らせなさいます。

implevit（充たす）という言葉に付けられた上昇旋律（第９小節など）、divites dimisit（富んでいる者を帰らせる）の部分の下降旋律（第12小節など）が象徴的です。

10.Suscepit Israel - Coro
Suscepit Israel puerum suum,
recordatus misericordiae suae.

10.合唱
主は僕イスラエルを助けてくださいました。
憐れみをお忘れにならなかったからです。

他のどの曲とも異なる、非常に神秘的な雰囲気を持つ曲です。オルガン曲にも編曲されたカンタータ第10番第５曲にもこの曲と同じ定旋律が使われていますが、こちらも定旋律を演奏するのは器楽のみ（トランペットとオーボエ）で、二重唱はこの曲と同じ部分を歌っているのが興味深い関連です。これはａ．で述べた理由により、器楽による定旋律の演奏が歌詞の具体化、すなわちイスラエルの救いのための主の到来を告げることを意味するという説があります。

なおヴォーカルスコアの脚注には「この曲が合唱と独唱者のどちらで演奏されるべきかは原典（自筆総譜）からは明かではない。編者（A.デュル）は独唱者の使用をお勧めする。」とあります。この根拠はこの曲の主役が声楽ではなく、既述のオーボエが奏する定旋律だからです。本日の演奏は小人数の合唱にてお届けします。

11.Sicut locutus - Coro
Sicut locutus est ad patres nostros,
Abraham et semini eius in saecula.

11.合唱
私たちの祖先、
アブラハムとその子孫に語られた通り
永遠に（憐れんでくださったからです）。

音楽の発想は**4.Omnes generationes**と同様です。マリアが神を賛える言葉はここまでです。

12.Gloria Patri - Coro
Gloria Patri, gloria Filio,
gloria et Spiritui sancto!
Sicut erat in principio et nunc
et semper et in saecula saeculorum. Amen.

12.合唱
栄光、御父にあれ、栄光、御子にあれ、
そして栄光、聖霊にあれ！
初めにありましたように、今も、
また世々に限りなくあらんことを。アーメン。

「頌栄誦」と言われる言葉が最後に歌われます。第20小節からはsicut erat in principio（初めにありましたように）の歌詞通り、第１曲の音楽が再現されます。

参考資料・リリンク指揮CD（35DC 181）添付の丸山桂介氏の解説および歌詞対訳
・ガーディナー指揮CD（411 458-2）添付のA.デュル解説
・「バッハ／シュヴァイツァー著」白水社
・リリンク指揮「バッハ／教会カンタータ全集」よりBWV10の解説
＊なおホームページには、BWV243aのための４つの挿入曲の歌詞対訳も掲載した解説がありますので、ご覧ください。

モーツァルト／レクイエム

ａ．モーツァルトとバッハとの関連　W.A.モーツァルト(1756～1791)はJ.S.バッハ(1685～1750)と対面することは適いませんでしたが、彼が33才の時、旅の途中のライプツィヒでバッハのモテト"Singet dem Herrn..."BWV225を聴いてとても驚き感動し、納得の行くまでパート譜を閲覧したという記録が残っています。

「レクイエム」の各曲は実に多彩ですが、殆ど全ての曲に、第１曲冒頭でファゴットで示された「レクイエム」主題（D-Cis-D-E-F）がそのまま、または変形されて、または断片化されて取り入れられるという、バッハのコラールカンタータを思わせる緻密な作りです。この主題はバッハの「フーガの技法」の主題に関連があるという説がありますが、最近たまたまバッハのカンタータ第４番「キリストは死の縄目につきたもう」（「レクイエム」同様トロンボーン３本が合唱の下３声をなぞる曲がある）を聴いてふと思ったのですが、その原曲のルター作の同名コラール（この更に元は復活節のための続唱「過ぎ越しのいけにえは」）第１行の旋律にも（途中までですが）類似しています。

ｂ．バッハのマニフィカートとモーツァルトのレクイエムの関連　救い主の誕生を待つ喜びを歌うマニフィカートと、死者の安息を願うレクイエム。この２曲に共に挿入されているのが、マニフィカートの項でもご紹介した第９詩篇唱という定旋律で、レクイエムでは**I. Introitus（VIII. Communioでも）**にてまず独唱ソプラノにて、続いて合唱ソプラノでも歌われます。この定旋律がレクイエムに挿入されている理由について確かなことはわかっていませんが、この件をバッハ研究家の礒山雅教授にお尋ねしたところ、「ここでモーツァルトは聖母マリアのイメージを思い浮かべているという推測が成り立つ」との見解を電子メイルでお知らせくださいました。

ｃ．「死者のためのミサ」について　バッハの「マタイ受難曲」をご存じの方は「最後の晩餐」の場面を覚えておいでのことと思いますが、「ミサ」とは簡単に言うとこの最後の晩餐が教会に受け継がれて、葡萄酒とパンを共に飲み食してキリストと一体化しようという儀式です。更に中世末期に確立された「死者のためのミサ」とは死者への罰の軽減を神に祈るもので、その典礼文中に「安息を．．．」"Requiem..."の言葉が何度も出てくることから「レクイエム」という通称が生まれました。一方、宗教音楽でもラテン語の「レクイエム」は普通のミサ（ミサ通常文）と共に作曲の対象として人気が高く、モーツァルト以外ではフォーレの作品などが有名です。

ｄ．作曲の過程　モーツァルトは晩年、ある伯爵からの依頼によりレクイエムの作曲に着手しましたが、**Lacrimosa**の第８小節まで書いたところで死亡たため、残りは弟子のジュスマイヤーが補ったとされています。その後ジュスマイヤーの補作で不完全と思われる部分を、よりモーツァルト的な作風に修正しようとする様々な試みがなされて来ました。今回私たちが取り組んだF.バイヤーによる編曲は、モーツァルトの他の作品を手本に和声を見直し、それを元にテンポ・強弱・アーティキュレーションなどにも修正を施したものです。

ｅ．歌詞対訳（太字は合唱）　演奏に際して、歌詞の発音にはドイツ語的な発音を用いています。

I. Introitus - Requiem	**I. 入祭文**
Requiem aeternam dona eis, Domine:	**永遠の安息を彼らに与えたまえ、主よ。**
et lux perpetua luceat eis.	**絶えざる光が彼らを照らしますように。**
Te decet hymnus, Deus in Sion	シオンにては主に聖歌を捧げ
et tibi reddetur votum in Jerusalem.	エルサレムにては祈りを捧げまつる。
Exaudi orationem meam!	**私の願いを聴きたまえ！**
ad te omnis caro veniet.	**全ての肉は御元に参ります。**

II. Kyrie
Kyrie eleison!
Christe eleison!

III. Sequenz
1.Dies irae
Dies irae, dies illa
solvet saeclum in favilla,
teste David cum Sibylla.
Quantus tremor est futurus,
quando judex est venturus,
cuncta stricte discussurus.

2.Tuba mirum
Tuba mirum spargens sonum
per sepulchra regionum,
coget omnes ante thronum.
Mors stupebit et natura,
cum resurget creatura,
judicanti responsura.
Liber scriptus proferetur,
in quo totum continetur,
unde mundus judicetur.
Judex ergo cum sedebit,
quidquid latet apparebit:
nil inultum remanebit.
Quid sum miser tunc dicturus,
quem patronum rogaturus?
Cum vix justus sit securus.

3.Rex tremendae
Rex tremendae majestatis,
qui salvandos salvas gratis,
Salva me, fons pietatis.

4.Recordare
Recordare, Jesu pie,
quod sum causa tuae viae:
ne me perdas illa die.
Quaerens me, sedisti lassus,
redemisti crucem passus,
tantus labor non sit cassus.
Juste judex ultionis,
donum fac remissionis,
ante diem rationis.

II. 求憐唱
主よ憐れみたまえ。
キリストよ憐れみたまえ。

III. 続唱
1. 怒りの日
怒りの日、その日に
地上は灰となる、
ダヴィデと巫女の予言のように。
どれほどの恐怖だろうか、
審判の時が来て
全てのものが厳しく正される時は。

2. ラッパは高らかに響きわたる
ラッパは高らかに響きわたる、
全ての国の墓の上に。
そして全ての人は王座の前に集め出される。
死者も生者も驚きに打たれる。
全ての生物が蘇り、
審判に答える時には。
ある本が持ち出される、
そこには全てが書かれてあり、
それによって全てが裁かれる。
故に審判者が席に着く時、
隠されたものは全て見出だされ、
罪を免がれるものはない。
その時哀れな私は何と言おうか。
いかなる保護者に頼るのか、
正しい人すらが不安な時に。

3. 恐るべき威光の王よ
恐るべき威光の王よ　、
救える者を無償で救いたまう方よ、
憐みの泉よ、私をお救いください。

4. 思いだしたまえ
思いだしたまえ、慈悲深いイエスよ、
私はあなたの来臨の理由であることを。
そしてその日、私を滅ぼしたもうな。
私を探し求め、裁かれる者の席に着き、
十字架の受難で私を救われた。
その御業を無になしたもうな。
正しき、懲罰の審判よ、
私に赦免を認めたまえ、
審判の日が来る前に。

Ingemisco tamquam reus
culpa rubet vultus meus:
supplicanti parce Deus!
Qui Mariam absolvisti,
et latronem exaudisti,
mihi quoque spem dedisti.
Preces meae non sunt dignae:
Sed tu bonus fac benignae,
ne perenni cremer igne!
Inter oves locum praesta
et ab haedis me sequestra,
statuens in parte dextra.

私は罪人のように嘆く。
罪に私の額は赤くなる。
こい願う私をお赦しください。
マグダラのマリアを赦し、
盗人の願いを容れられたあなたは
私にも希望を与えてくださった。
私の祈りはとるに足らないものだが、
あなたの憐れみによって、私を
永遠の火よりお救いください。
あなたの羊の中に私をお加えください。
山羊より私を引き離して
あなたの右の側に立たせてください。

5.Confutatis
Confutatis maledictis,
flammis acribus addictis:
Voca me cum benedictis.
Oro supplex et acclinis,
cor contritum quasi cinis.
Gere curam mei finis.

5. 呪われた人々が入りまじり
呪われた人々が入りまじり、
激しい炎にさらされる時、
私を祝福された者としてお呼びください。
私はひれ伏して祈ります。
心は灰のように砕けます。
私の最後の時を心にかけてください。

6.Lacrimosa
Lacrimosa dies illa,
qua resurget ex favilla
judicandus homo reus.
Huic ergo parce Deus,
pie Jesu Domine.
Dona eis requiem! Amen.

6. 涙の日
涙のその日、
人が灰の中から蘇り
裁きにかけられる。
神よ、彼を憐みたまえ。
主なる慈悲深いイエスよ。
彼らに安息を与えたまえ。アーメン。

IV. Offertorium
1.Domine Jesu Christe
Domine Jesu Christe, Rex gloriae!
Libera animas omnium fidelium defunctorum

de poenis inferni et de profundo lacu!
Libera eas de ore leonis!
Ne absorbeat eas tartarus,
ne cadant in obscurum:
sed signifer sanctus Michael
repraesentet eas in lucem sanctam:
Quam olim Abrahae promisisti, et semini ejus.

IV. 奉献唱
1. 主イエス・キリスト
主イエス・キリスト、栄光の王よ！
全ての死した信者の魂を
**　解き放ってください。**
地獄での罰と深淵の底から。
彼らを獅子の口より解き放してください。
かれらが地獄に呑みこまれず
闇に落ちぬよう、
旗手聖ミカエルが
彼らを聖なる光に導いてくださいますように。
その昔アブラハムとその子孫に
**　お約束くださったように。**

2.Hostias
Hostias et preces tibi Domine,

2. われらが捧げまつる
（私たちは）賛美のいけにえと祈りとを

laudis offerimus:	**主に捧げます。**
tu suscipe pro animabus illis,	**本日ここに追悼する**
quarum hodie memoriam facimus,	**彼らの魂のためにお受けください。**
fac eas Domine, de morte transire ad vitam.	**主よ、彼らを死から生にお移しください。**
Quam olim Abrahae promisisti, et semini ejus.	**その昔アブラハムとその子孫に**
	お約束くださったように。

V. Sanctus	**V. 聖なるかな**
Sanctus, sanctus, sanctus,	**聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、**
Dominus Deus Sabaoth!	**万軍の主なる神。**
Pleni sunt coeli et terra gloria tua.	**主の栄光は天地に満ちる。**
<u>Osanna</u> in excelsis!	**いと高きところにホサンナ　。**

＊下線部：ヘブライ語では「ホシア・ナー」、「救いたまえ」という意味だった。

VI. Benedictus	**VI. 祝せられさせたまえ**
Benedictus qui venit in nomine Domini!	主の御名によりて来りたもう者は
	祝福されますように。
Osanna in excelsis!	**いと高きところにホサンナ。**

VII. Agnus Dei	**VII. 神の小羊**
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:	**世の罪を除きたもう神の小羊よ**
dona eis requiem.	**彼らに安息を与えたまえ**
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,	**世の罪を除きたもう神の小羊よ**
dona eis requiem.	**彼らに安息を与えたまえ**
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,	**世の罪を除きたもう神の小羊よ**
dona eis requiem sempiternam.	**彼らに永遠の安息を与えたまえ。**

VIII. Communio - Lux aeterna	**VIII. 聖体拝領唱**
Lux aeterna luceat eis, Domine:	**永遠の光が彼らを照らしますように、主よ、**
cum sanctis tuis in aeternum,	**あなたの聖人たちと共に永遠にあれ、**
quia pius es.	**あなたは慈悲深い方なのですから。**
Requiem aeternam dona eis, Domine:	**永遠の安息を彼らに与えたまえ、主よ。**
et lux perpetua luceat eis.	**絶えざる光が彼らを照らしますように。**

参考資料・「レクイエム・ハンドブック／高橋正平」（株式会社ショパン）
・三澤洋史先生の練習中のお話
・ホグウッド指揮CD（F35L-50060）添付の石井宏氏の歌詞対訳
・「グレゴリオ聖歌集大成」CD（KICC 6129/48）添付の歌詞対訳

＊なおホームページには、「死者のためのミサ」と各曲の主題の関連について、もう少し詳しく記述した解説が掲載されていますので、ご覧ください。

1997.1.23 萩野

♡♣♢♠　浜松バッハ研究会演奏活動年譜　♡♣♢♠

主催公演

上演日	上演曲目	指揮	上演会場
1985.12.26	バッハ「クリスマス・オラトリオ」第１～３部	河野周平	遠州栄光教会
1986. 3.28	バッハ「マタイ受難曲」朗読と抜粋	河野周平	遠州栄光教会
1986.12.22	バッハ「クリスマス・オラトリオ」第１～３部	河野周平	遠州栄光教会
1987. 4.13	バッハ「マタイ受難曲」朗読と抜粋	河野周平	遠州栄光教会
1988. 3.21	バッハ「マタイ受難曲」一部割愛	河野周平	福祉文化会館
1988.12.26	バッハ「クリスマス・オラトリオ」第４～６部	河野周平	遠州栄光教会
1990.10. 7	バッハ「ミサ曲ロ短調」	三澤洋史	福祉文化会館
1990.12.16	バッハ「クリスマス・オラトリオ」第１～３部	三澤洋史	遠州栄光教会
1991. 8.12	バッハ「ヨハネ受難曲」朗読と合唱	三澤洋史	龍山村森林文化会館
1992. 3.22	バッハ「ヨハネ受難曲」	三澤洋史	福祉文化会館
1993. 3.21	ヘンデル「メサイア」	三澤洋史	福祉文化会館
1994. 6.12	「無伴奏合唱への誘い」BWV225/229他	三澤洋史	遠州栄光教会
1995. 1.22	「ニューイヤーコンサート」バッハ名曲選他	三澤洋史	遠州栄光教会
1996. 2.18	バッハ「マタイ受難曲」全曲	三澤洋史	アクトシティ中ホール

合同・協賛公演

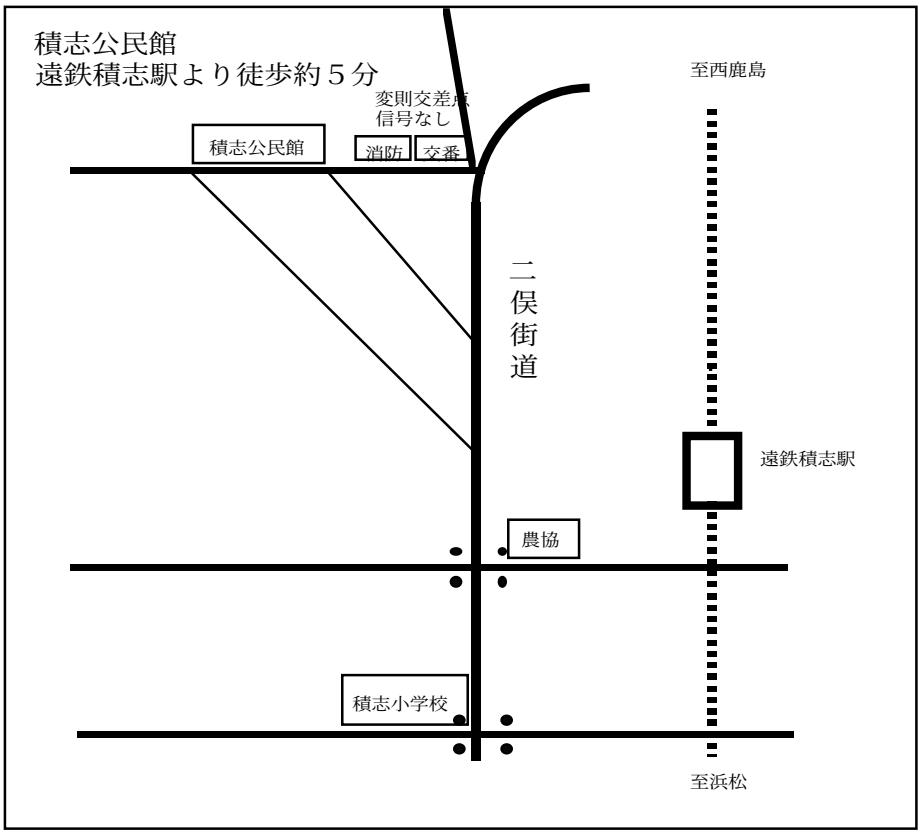
上演日	上演曲目および内容	上演会場
1986. 9.15	浜松クリスチャン・クワイアとの合同演奏会 モーツァルト：Sancta Maria K273,Regina Coeli K276 S. 藤井多恵子、Pf. 鈴木敦子、Orch. カペラ・アカデミカ	遠州栄光教会
1986.10.19	「ムーンライト・コンサート」協賛	天竜・月光山海蔵寺
1987. 9.20	教会音楽コンサート協賛－BWV56/80 Br. 今仲幸雄	遠州栄光教会
1987.10. 9	「ムーンライト・コンサート」協賛	天竜・月光山海蔵寺
1988. 3. 5	正泉寺「山寺音楽会」協賛 バッハ「マタイ受難曲」コラールとその原曲	引佐郡井伊谷正泉寺
1991. 3.17	瑞穂会ピアノ発表会賛助出演 モーツァルト：12番ミサよりキリエとグロリア、Ave verum corpus、 バッハ：BWV140よりコラール	クリエート浜松
1991. 6.30	掛川市駅南学習センター美感ホールのオープニング モーツァルト：Sancta Maria K273,Regina Coeli K276,Ave verum corpus Orch. カペラ・アカデミカ	掛川市美感ホール
1991.12.23	市政80周年記念ラートハウス・コンツェルト バッハ「クリスマス・オラトリオ」抜粋、Orch. カペラ・アカデミカ	浜松市役所ホール

☆★☆★☆　合唱団員募集　★☆★☆★

浜松バッハ研究会

浜松バッハ研究会も昨年上演の「マタイ受難曲」のための練習以来結構大所帯となり、創立以来のアットホームな雰囲気を保ちつつも、新たな飛躍を遂げ始めました。今回は表現の幅を拡げる目的でモーツァルトの「レクイエム」を取り上げましたが、その成果をバッハの作品に活かすべく、次回はバッハの小品集、次々回はバッハの大曲と、２ヶ年計画にて臨むことになりました。このような私たちの活動に興味をお持ちの方は、ぜひ一度練習場までお越しください。

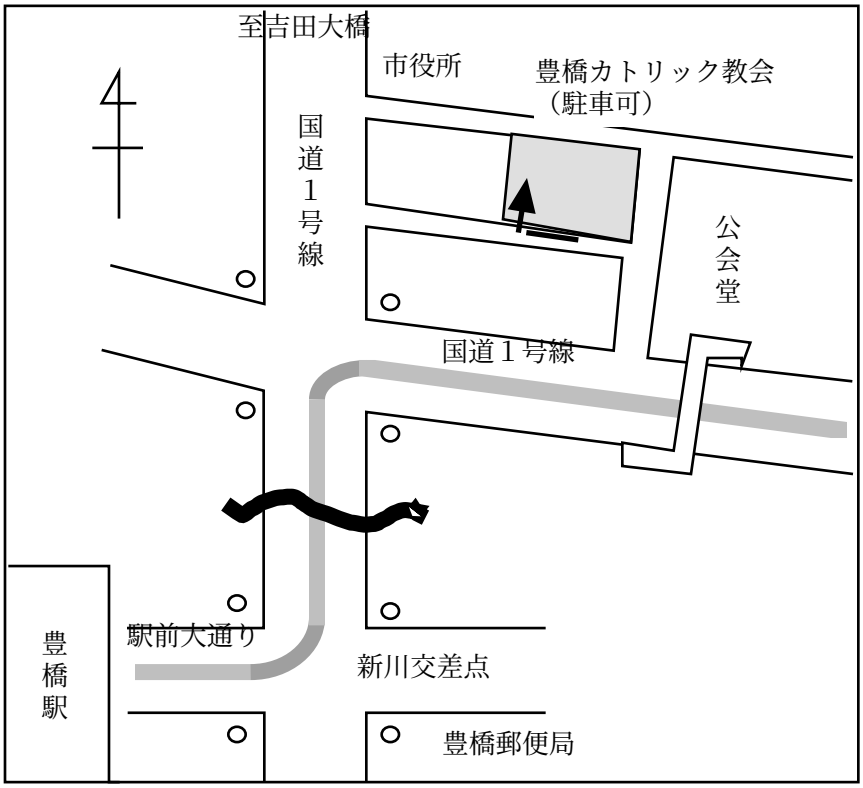
今後の活動　・モテト"Jesu, meine Freude"、カンタータ第106番／第131番－98年3月上演予定
　　・「ミサ曲ロ短調」－99年10月上演予定
練習場　積志公民館（下地図）ほか
練習日時　・毎週土曜日　19:00～21:30
　　・月１回日曜日 13:00～17:00（三澤先生の練習）
会費　月額2500円（学生2000円、高校生1500円）
連絡先　早川徳次（☎053-472-0341[FAX可]、電子メイル tokuji@vsg.emi.yamaha.co.jp）
浜松バッハ研究会ホームページ
http://www.hamamatsu-pc.ac.jp/users/mori/bach-society/bach-society.html



豊橋バッハアンサンブル

バッハの「マタイ受難曲」を歌いたい、だけど毎週浜松まで出かけるのは無理・・・という豊橋在住の人達が集まって、1994年8月にできた合唱団が豊橋バッハアンサンブルで、いってみれば、浜松バッハ研究会の分身です。毎週豊橋で練習し、月１回は浜松に出かけて、浜松バッハ研究会と一緒に、三澤先生の練習に参加しています。豊橋及びその近くにお住まいで、次回上演予定のバッハのモテト・カンタータを歌いたい方は、ぜひ一度練習を見にお越しください。

練習場所と時間　・毎週金曜日　19:30～21:30　豊橋カトリック教会（下地図参照）
・月１回日曜日13:00～17:00　浜松市積志公民館（三澤先生の練習）

会費　月額1500円

連絡先　安井研一　☎0532-47-0676